図説 天才の子供時代

E・ル・ロワ・ラデュリー
ミシェル・サカン 編
二宮 敬 監訳

幼くして神童、少年にして天才、青年にして秀才、大人になればただの人……。

これは子どものころに覚えた〈はやし言葉〉の一つである。表題を見て、ふと、思い出したのである。50年近くも前に覚えた〈はやし言葉〉を思い出させてくれた、この一冊。

神童とは、何か。むろん、その定義は時代によって違う。古代においては、神童は悪魔の申し子であった。

時代はくだって18世紀、かのモーツァルトは天才児として、時の教皇から勲章を受けている。

近代――。幼児期、少年期・少女期という考え方が確立してから、神童の価値は下落してしまった……。

A5判450ページに近くて、持てば、ずしりと手ごたえがあって、内容もなかなかのものだ。表題に〈図説〉とあるが、これは、パリの国立図書館で開かれた同名の展覧会の、解説を兼ねたカタログの全訳、なのである。

したがって、8ページにわたるカラーの口絵をはじめ、同図書館の蔵品、展示された多くの絵や資料や写真などが、各ページを飾っている。

構成は年代順で、「神童―古代と中世」「神童の黄金時代―16～18世紀」「模範的な天才児とロマン派的天才―19世紀」「英才児と天才への幻滅―20世紀」と並ぶ。

執筆は、パリ国立図書館長でコレージュ・ド・フランス教授のラデュリー以下、それぞれ専門家が担当している。訳者もまた同様に、それぞれ専門家が受け持っている。

世界の歴史に名を残した〈天才〉の子供時代を、古今の文献によって紹介しながら、それぞれが生きた時代によって、扱われ方や認識の違いを論じている。

神童から〈天才〉少年への移行――。人物的には、やはり芸術の分野が圧倒的に多いけれども、ジャンルを超えて学際的に論じる視野の広さと深さが、見事である。

（新曜社・4800円）

（あ）